

あを 1

2025



写真・不寝

一月集

坐・誹

佐藤 竹僊

草を引く草よりすこし力入れ
ひと手立またひと手立一草枯る
息長く眞夜の秋風庭とほる
秋の月そろそろ窓を出てゆきさう
街路樹に秋のふかむを覺えたる
一草にゆきどまりあり冬の蟻



空襲から幾夜目母に手をとられ
居間の灯を消してこちらの冬燈す
このあたり物賣の來ず十二月
妻の姓「ひ」と「し」があつて十二月
お晝から出かけるつもり十二月
年越のことなにもせず湯を沸す
初雪が降つたといふに甘睡せり
水中につつこんでゐる秋の草
初映晝撃たれしインディアンに蒙古斑



フアंक

篠田大佳

北風を近ごろ丸き背で受ける
東京はおもろくないわアイス食おか
秋天神頭が良くなりますやうに
病院の窓冬雲も青空に
冬晴るる我が血を拭ふ手術室
病院の路傍に強く石路の花
冬日和歌碑の「な」の字に糞詰まる
枯蓮のかさわさと鳴る上野かな
師走はやフアंकは傷に障るかも



秋の日

須賀敏子

月天心那須野が原を明るくし
吊り橋の揺れて踏ん張る鰯雲
きらきらと無音の中の落ち葉かな
背伸びして丸く太ったキーウイを
妹よブロッコリーの緑濃し
新米を少し多めに炊きあげる
短命の母の墓前に秋惜しむ



六義園

都築繁子

池の端に置かるる浮き輪冬浅し

対岸の雪吊りの松見て飽かず

繰り返す鴨の航跡冬紅葉

冬うらら女庭師の長梯子

展示さる懸崖菊のみな蕾

肩の力を抜いて庭園冬紅葉



和紅茶

長崎桂子

水道使用の儉約や温暖化協力

ヒドリガモ飛来し笑む南勢の人

海苔養殖や菌つけ祈り初冬の海

疲れきて未だ中腹野紺菊

店頭のはしりの野菜冬きたり

老人会や文化の日唱歌披露

冬はじめ和紅茶にしばし憩ひをり

冬たてり小春日もなき日のつづく

伊勢湾の漁はすたれて秋ふかむ



いないいないばあ 森なほ子

長生きの媼ふくよか豊の秋
我入るはもう少し先の墓洗ふ
咲き継いで終りの薔薇の色さやか
いないいないばあと満月雲を出づ
この服も派手になりしと秋扇
払はれて出湯に浮きたる羽虫かな
浅川を缶流れ行く秋の音
乳飲み子を抱く埴輪や冬温し



越前 赤座典子

実千両鋭き青のやはらぎて
寒いかと文鳥に問ふ冬立つ日
憂き事のあれよあれよと冬はじめ
青星や二十二年の和田毅
冬温し打ち明け話立ち話
谷川さんの詩に逃げ込みて葛湯溶く
退院は栄えある帰還冬苺
鬼柚子の威風堂々ロビー守る
せいこ蟹旅の記念のランチかな
越前の降りず降らずみ冬菜畑



どこもかしこも放屁虫 秋 川 泉

「もうやめた」 立ち上がる子に放屁虫
どこまでもくつついている放屁虫
げんかつぎ放屁虫共散歩する
野良猫の遊びあきたる放屁虫
放屁虫好みて籠に放ちたり
初時雨なぞめく女の大荷物
樽柿のかほりの満る庫裏の中
立ち飲みにいささか呼ばれきぬかつぎ
ジレと云う今流行りなるちゃんちゃんこ
地に響く川面いっぱい冬花火



雑詠

七郎衛門吉保

彼の国や廊下の奥の冬隣
百舌鳥鳴くや民意如何程関西圏
我が家も二季になりけり忍冬忌
大壺に菊競ひをる天地人
芭蕉碑に沿ふ帰り花戸塚宿
踏切は故郷の音石路の花
侘助や猫縁側に欠伸して
冬来ても山椒に芋虫居候
雀卓に三百歳の小春かな
三世代雀卓囲み冬ぬくし



すずめ瓜

篠田純子

すずめ瓜赤くなる頃嫁ぎたる

里神楽翁の髭の靡き癖

空あをくもみぢ且つ散る無縁坂

木枯や啄木泣きし切り通し

金賞の菊にとまりて蝶しばし

かはたれ時宿痾の腰へ温湿布



十一月号作品より

篠田大佳・森なほ子・佐藤喜孝

秋の雨まるまる猿はほぼ人間

佐藤竹僊

まず、「まるまる」の意味するところを決めます。「丸まる」と「丸々」が浮かびますが、どちらで取っても意味は通りそうです。動作上は、「丸まる」で読んで、「丸々」の意味を僅かに残して読んでいきます。

俳句は、読者を常識を超えた世界に誘ってくれます。俳句を通して秋の雨をじっと眺める猿の物憂げな表情が思い描けた時、猿の感じたであろう憂鬱さが広がっていきます。（大佳）

原發ですることといへば秋刀魚焼く

佐藤竹僊

苦笑させられました。原発という巨大かつ致命的な装置が、電気として末端の私達に接するのは、四畳半の灯を灯し洗濯機を回し、ロースターの秋刀魚を焼く熱としてである。廃炉のための第一歩の、デブリの取り出しにやっと成功したと最近のニュースで知った。全部取り出すのに、四〇〜一七〇年かかるという。それすらはつきりしない話なのだ。民草は秋刀魚でも焼くしかない、と居直っている。電熱で魚を焼く家庭は少数派だとは思いますが。（なほ子）

群青の空深くして鰯雲

七郎衛門吉保

この作者の句としては異色です。批判精神旺盛な時事俳句を得意とする作者ですが、その日の真つ青な空と雄大な鰯雲には抗しきれなかったらしいですね。(なほ子)

大壺に二本の芒蕎麦啜る

七郎衛門吉保

句会でこの句を頂いた。書きはじめたがどこかイメージが違ふ。句会で拝読した句は「大壺に二本の薄蕎麦処」であつた。「処」で趣のある店構、おいしさうな蕎麦店を想像して句を頂いた。掲句は「蕎麦啜る」とし場所の設定を店と固定せず読者に任せた。「薄」が「芒」に変更したのも句の雰囲気を変えたかとおもふ。元句の壺の大きさに比し活けられた芒が二本といふアンバランスなおもしろさは捨てがたい。(喜孝)

見つからぬ銀木屋の香はすれど

篠田純子

銀木屋はにおいが特徴的な花で、金木屋ほどにおいは強くなく、花に近づかないとおいがわからないほどだそうです。作者は、銀木屋のにおいを捉えています。近くに銀木屋らしき花が見つからず、においの元がわからない状態です。例えば、香水のように人工的ににおいを強調したのではないかと想像しますが、どこかミステリーの謎を考えているような心持ちで、答えのないことが癖になる一句です。(大佳)

秋風やまだ収まらぬ脳多動

篠田純子

毎月『あを』の作品欄で新語(私にとつての)に出会ふ。それだけ私は今の世に適應していないのだと自覚してゐる。半面『あを』の皆さまの社会への対応力に敬意しかない。掲句の「脳多動」アルファベットでもない日本語なのに不明とは我ながら呆れる。「脳多動」又は「脳内多動」は「脳内の活動が過剰になる状態」と。掲句から察すると脳多動の状態は収まつたり現れたりするもののやうだ。ぐじぐじと書いてゐるが掲句の「秋風や」は中七以下を見事に俳句作品に収斂された。自身の心、身体の動きを「秋風」と対比又は「秋風」の中に置き客観視する。俳句は度量のひろい詩形だと思つた。(喜孝)

「母より」と迷惑メール秋涼し

篠田大佳

「俺を坊やと叫ばないで」という句の次にこの句です。一読ニヤリとしてしまいます。母上を存じているのでいっそうです。大男の息子さんが母からのメールを、「迷惑メール」と言い捨てたのには笑われました。でも本音はちゃんと「秋涼し」に表されています。「秋暑し」ではなく……。 (なほ子)

§

ウィットの効いた俳句。「母より」と「」で囲む表記も気が利いてゐる。メールの内容如何に関はず「母より」で迷惑メールなのである。なほさんが書かれてをられるやうに、迷惑メールといひつつ「秋涼し」とまとめてゐる。理想的な母子関係である。(喜孝)

骨密度満たして秋の旅に発つ

須賀敏子

骨粗しょう症の検査を受けたのでしょうか。骨密度も基準に達していて、旅の懸念がなくなつて、気分も軽やかに旅に出たと読みました。検査の憂いや、秋の憂いが軽やかな気分の中に内包されていて、憂いから解放された気持ち、旅情に一層の深みを与えています。（大佳）

隣より声のかかりて初秋刀魚

須賀敏子

隣近所の方と「初秋刀魚」だけで会話を交はせる。敏子さんが築き上げてきた一朝一夕では築けない人とのつながりである。わたしが現住所に越してきて三年ほど経つが掲句のやうな関係は全く築けないので、この句がうらやましく見えたことです。（喜孝）

新札のお釣り弾める秋祭り

都築繁子

秋祭りの露店で大きいお札のお釣りが出た光景と読みます。二〇二四年七月三日に新札が発行されましたが、掲句の時期の実勢は、旧札と併用していて徐々に新札に移行している印象です。秋祭りの時期では、新札は物珍しいものであり、新札をたくさんお釣りにくれるというのは、宝物を放出するような高揚感があり、嬉しい気分になったと読みます。秋祭りも特別な出来事になったと思います。（大佳）

§

二十年ぶりの紙幣、お世話になったお札との別れ、時の流れを感じる。先日自販機に北里柴三郎を入れたら何度かすぐに吐き戻してきた。冷凍ラーメンをあきらめて帰宅した。わたしと同じく自販機もなじめてゐないやうだ。掲句の自販機は迷惑もなく新札を吸ひ込む。釣銭は心地よい音で受皿に落下。と読んだが「秋祭」で「自販機」は読み間違いのやうだ。「弾める」ものは釣銭でなく新札を受け取った作者の心の弾みと詠んだ大佳さんの解が自然であらう。作者の意図とは違ふ読みになつてしまった。（喜孝）

梨むいて友とひとときむだ話

長崎桂子

日常のひとときを描いています。当たり前の光景のように見えるですが、現代では、契約の必要上話すことばかりで、無駄なものを省いて時間を埋めていくうちに、ひと息ついて友と語らうこともできなくなっています。まして、時間は有限です。掲句の光景は得難い体験と思います。（大佳）

§

『むだ話、葉にまざる』早川良一郎著』といふ本が「みすず書房」から出てゐる。書名しか知らないが納得してしまつた。ほんとうに「むだ話」は捨てたものではない。わたしもひと月に一回いや二回むだ話をする機会に恵まれてゐる。句会へ行く途次タクシー運転手さんとむだ話をする。酒や政治の話などで意気投合したりする。運転手さんは迷惑とおもふが、気のよい運転手さんに出会ふとおしゃべりが過ぎてしまふ。桂子さんにもむだ話をする時間、人が居られること

は「薬にまさる」ことであらう。(喜孝)

冷房に生かされている古いの日々

森なほ子

今夏も、冷房の使い方ひとつで命に関わるほどの猛烈な暑さが、連日続きました。冷房を控えると熱中症にかかり、冷房をかけ続けると電気代がかさむというジレンマがありました。行政では、冷房設備を備えた施設をクーリングシェルターとして開放するという試みもやっていたようです。冷房と生存が直結したという作者の実感に共感します。(大佳)

色鳥や行司装束嵩張れる

森なほ子

テレビがまだこの世にない時代は新聞、ラジオで大相撲を楽しんだ。小学生のころ同級生の小泉君のお兄さんが電気屋さんで自作でテレビを作った。確か街頭テレビは後の世だったと思う。学校が終ると十五日間通った。剥き出しのブラウン管に映る大相撲は輝いてゐた。横綱は鏡里、東富士の時代であつた。

掲句、カラーテレビで見る大相撲は一段とカラフルである。力士の化粧まわし、締込みの多彩なことなどは驚く。力士に対し行司は絢爛豪華。あの衣装で草履履きでよく勝負を裁けるものだと感心する。なほ子さんはこの行司さんに「色鳥や」と付けた。色鳥も様々あるが私はすぐ鴛鴦を連想した。が、鴛鴦は冬の季語だが色鳥ではない。鴛鴦の一部は渡つてくるらしいが、ほとん

どは留鳥とのこと。

私の好みはだうでもよく季語を「色鳥や」とさらりと付け「嵩張れる」と行司をよく見て的確な言葉で作られてゐる。ときどき思ひ出しては楽しめる一句になるとおもふ。ついでにNHKに一言。呼出の声を聞かせてほしい。(喜孝)

笑みし事一つありし夜ちちろ虫

赤座典子

「笑みし事」、なんだったのでしょうか？ 嬉しくてもおかしくても人は笑います。この句では微笑んだ、くらいでしょうか？ そう思わせるのは「ちちろ虫」です。テレビを見て笑ったのではなさそうです。この「一つ」も意味深長です。(なほ子)

瑠瑠を纏ひて着地鬼やんま

赤座典子

わたくし、写生句と称するものが好きなのだが、なかなか気に入ったものは出来ない。出来たなとおもふときは、対象物とつながったといふ、気分の良い錯覚に浸る。この句は大きなトンボの頭部や尾部を「瑠瑠を纏ひ」と見事な比喻で詠まれてゐる。本当にさうだとおもふ。詠み得た時の満足感を私も与つた。(喜孝)

そんなこと言へなかつたよ秋暑し

秋川 泉

面白い句です。上五中七だけ読むと、若者がはにかんだり恥じらったりして、何も言えなかったのかと思わせるが、季語は「秋涼し」ではなく「秋暑し」である。そんな気の毒なこと、または厚かましいこと、とても言えなかったよ、みたいなことになってきませんか？ 季語一つで色々変わるから面白いですね。会話体が生きています。（なほ子）

闇 迫る 芒の 波に 人の 声

秋川 泉

夕闇の迫る芒の海の中に立つ。径も不確かになる。そのやうな折りに出会ふ人の声、泉さんだう聞こえたのだらうか。ホッとしたのだらうか。それとも。わたしは山道を一人で歩いてゐる時に人とすれ違ふ時ホッとはせず緊張したので。泉さんはどのやうな意図で詠まれたのか逡巡した。書きだした時は後者の方であつたのだが泉さんはきつとホッとされたことと拝察した。（喜孝）



俳句と着物

七郎衛門吉保

第一話 角川俳句大歳時記と着物

句会や吟行には余程の悪天候でない限り、着物姿での参加を心掛けています。そんなことから主宰喜孝さんより、表題をテーマにした短文投稿を請われた。これまでにも『あを』誌上に着物との関わりについて、何回か記事を寄せた記憶がある。

直近は二〇一八年一月号から12回シリーズで、見開き頁に掲載した十二枚の写真である。年間の季節感、に見合った着物（長着）とそれに見合った帯と羽織紐。これを一枚の絵として構成し、それに見合う俳句として久保田万太郎の一句を文字で加えて、月々の写真を作成した。最終の12月号には写真の他に、一年の纏めの意を含めて「日本文化 着物と俳句」を書き、和服で俳句を始めた経緯、和服を着る意味合いなどを記した。

それから六年が過ぎたが、『あを』への投稿や句会の参加を休むことなく続けてきたお陰で、俳句や季語についての理解に、それなりのプラスαがあるように思う。そこでα分を加味した「俳句と着物」に触れてみることにした。

α分を高める手立てとして、二〇二三年に一年をかけて刊行された、角川俳句大歳時記、春・夏・秋・冬・新年の各巻六千円への投資をした。高価ではあったがそれなりの効果は十分にあつたと考えている。

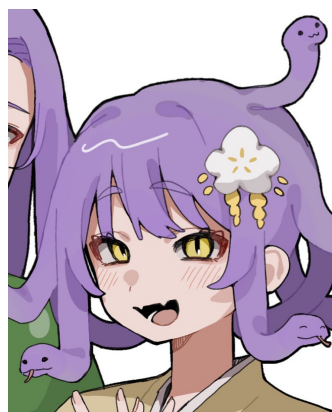
そこでまずは着物に関わる季語を探すことから開始した。春の巻…「葎の衣」

から始まり十二語、夏の巻…更衣以下二十八語、秋の巻…貸小袖他七語、冬の巻…袴着から春着縫ふまで十四語、新年の巻…着衣始他四語であつた。次回以降にもう少し掘り下げた話題提供を試みることにする。



秋收集

枯茅の立つてはみられなくなりぬ	佐藤 竹僊
曼珠沙華鷺の捕食の長々と	篠田 純子
ヒルズ秋市兵衛町の名の消えて	篠田 大佳
秋雨や若き鳥のかあと鳴く	須賀 敏子
旅人に傘は小さし秋の雨	都築 繁子
亜米利加の野球見ながら柿を剥く	長崎 桂子
雨上がり陽の射してこそ薄紅葉	
秋さやか土手登りきる杖ついて	
秋蝶の来ており池の木のベンチ	
拭き掃除をへて窓外秋の色	



名月や雲ふりはなし輝けり	森なほ子
川音へ降りる階段葛の花	
大空の雲みな染まり秋夕焼	赤座 典子
落葉松のチェンバロ響く秋野かな	秋川 泉
雨催激しく揺れる葛の花	
秋茄子や今朝目覚めたる夫が居て	
猫の居た日々なつかしむ秋の夜	七郎衛門吉保
秋の風提灯の如コキア揺れ	
整然と自由奔放翳雲	



季語あれこれ 「新年の季語」



新年の季語は命が短いものが多い。一日しか使へぬ季語の多いこと。元旦にはじまり元朝・歳旦…………と。まづは元日から、

屠蘇も猫もはこびこまれしお元日	赤座典子
箸洗ふ音の清しさお元日	関口ゆき
元日や車内放送変りなし	山莊慶子
始祖鳥の翔びかうてゐるお元日	佐藤喜孝
元日閉館返却口に本落す	竹内弘子
元日の干しもの下がる宵の道	佐藤喜孝
夫見舞ふ元日の空どんと晴れ	齊藤裕子

おさがりといふうつくしい季語がある。好きな季語のひとつだ。高野素十も

御降といへる言葉も美しく

あたたかき足袋はいて立つお元日	佐藤喜孝
甲斐が嶺の赤く染みたりお元日	井上石動
元日のひととき美しくちらめける	長崎桂子
元日や三和土を抜けて裏の藪	佐藤喜孝
元日もはや夕月の光り初め	森なほ子
お元日外出すなど云ふお触れ	田中藤穂
お元日鳩も雀も水を飲む	田中藤穂
梵鐘の音響きたる御元日	秋川 泉
新聞の嵩に驚くお元日	森なほ子
元日をはる色残す空風荒ぶ	佐藤竹僊
元日の夜「地震が治つたらまた遊べる？」	篠田大佳
元日に震度7とは能登半島	須賀敏子
元日や曾遊の地に大地震	赤座典子
元日の地震の長きに天仰ぐ	秋川 泉

と詠んでゐる。おさがりも雨より雪を望んでゐる人もゐる。

御さがりやこごと開く朱傘 ^{かうかさ}	梅 室
------------------------------	-----

おさがりや犬もかれんなマントきて	鈴木多枝子
お降りやあかごの髪のはふはと	佐藤喜孝
雪のお降り何んと言つても遠刈田	堀内 一郎
お降や雀鴉も静かなり	佐藤恭子
お降りにほうと息つく五官かな	森なほ子
御降りや老いどちの足覚束な	芝宮須磨子
御降りや半蔵門へ傘の列	竹内弘子
御降りの雪になれやとあふぐ空	佐藤恭子
御降をちらとも見らで寿司を巻く	齊藤裕子

初春や青空の青一人占め	芝宮須磨子
初春の混み合ふ電車よろこぶ子	渡邊京子
初春や羊の顔のいとやさし	森 理和
初春のミャンマー料理青菜かな	田中藤穂

初春のダンスステップ老夫婦	山莊慶子
化粧せり老の初春迎ふべく	竹内弘子
遊覧船初春の海ほぐれをり	長崎桂子
家根に置く石初春の影の濃く	佐藤喜孝
初春や出づる大皿柿右衛門	七郎衛門吉保
初春のひかりの中の実柚子かな	須賀敏子
初春やバラ色のほほルノアール	秋川 泉
初春や奪衣婆も頼ゆるびをり	田中藤穂
喜怒哀楽幾多越え米寿初春	長崎桂子
初春の女子の駅伝笑と苦渋	長崎桂子
千鳥足の爺を支へる孫新春	篠田純子
煙突の白煙直し四方の春	赤座典子
四方の春ひとつ年とる一億人	佐藤喜孝

一日の異國の街を見てきたる	佐藤喜孝
一日も熾火が空にのこるのみ	佐藤喜孝
漆黒に二日の富士の鎮まりぬ	赤座典子
後早に鴉のわきを抜け二日	佐藤恭子

明き白に二日の予定筆下ろす
 二日はや初目葉と言ふべかり
 二日かな松のうしろに夕茜
 穂穂のしらじらとある二日かな
 松の内一番静かなる二日
 かもぬよりしきぬが二日早や古ぶ
 コンビニで切手を舐めて二日かな
 二日はや日をうけとめし蒼かな
 中学生寝癖立たせて二日かな
 青年にゲーム教はる二日かな
 坊主捲り孫に教はる二日かな
 二日かな喃語にここに「だーいすき」
 魚市場かわくにほひも三日かな
 はや三日ブランデーグラス両の掌に
 はや三日干し物越に富士の山
 三日暮る群れ鴨の声町こゆる
 三日はや母の掌を占む輝の華
 子午線を指ではじいてゐる三日
 佐藤恭子
 堀内一郎
 佐藤喜孝
 佐藤喜孝
 木村茂登子
 定梶じょう
 佐藤喜孝
 佐藤喜孝
 篠田喜孝
 篠田喜孝
 田中藤穂
 赤座典子
 篠田大佳
 竹内弘子
 芝 尚子
 須賀敏子
 渡邊友七
 渡邊友七
 佐藤恭子

獅子舞をちらと見かける三日かな
 三日はや終日寡黙にハーブティー
 硯海の昼月擦りをろす三日
 三日はやクロワッサンの恋しかり
 雨戸引く三日の明けの吹雪かな
 待ちかねし下り諸白三日かな
 三日はやタヲルのほつれのごときかな
 はや三日月鈴鹿嵐に向かふ帰路
 三日にはホットケーキを初食す
 はや三日大学マラソン見損ふ
 三日にしてニュースもやつと寝正月
 三日朝駅伝と逆箱根入り
 青き空突き抜けてゐる三ケ日
 三ケ日遊び疲れし爪の伸び
 三ケ日営業中なり動物医院
 大病院全室灯し三ケ日
 三ケ日おもてをあるく下駄の鈴
 喰ひぶくれ鏡の中の三が日
 赤座典子
 芝宮須磨子
 佐藤恭子
 須賀敏子
 長崎桂子
 佐藤恭子
 佐藤喜孝
 長崎桂子
 大日向幸江
 大日向幸江
 篠田大佳
 七郎衛門吉保
 芝 尚子
 河合笑子
 森 理和
 芝宮須磨子
 竹内弘子
 鎌倉喜久恵

三ケ日すし屋が走る水戸街道
 三が日中華料理の恋しけれ
 リハビリも心新たに四日かな
 息をつく小さき手の跡四日かな
 空堀に落葉がうごく四日かな
 四日はや酒瓶奢侈な塵置場
 はや五日急かず自転車乗る誓
 五日には映画と決めて家を出る
 海上に白き満月松七日
 のど飴を選ぶあれこれ松七日
 人日や富士見坂より富士見えず
 人日や地球のことを考へる
 人日ははらから集ふと定めけり
 人日や供ふ練切石の梅
 人日や蓄へてあり缶蜜柑
 地下駐車場は薄き瓦斯室人日なる
 人日の落札ハンマーやや強め
 松の内水族館に泳ぐ人
 佐藤喜孝
 秋川 泉
 森山のりこ
 石森理和
 佐藤竹僊
 篠田大佳
 長崎桂子
 須賀敏子
 鎌倉喜久恵
 須賀敏子
 後藤志づ
 芝 尚子
 鎌倉喜久恵
 森 理和
 大日向幸江
 篠田純子
 篠田純子
 佐藤喜孝

道尋ね深くお辞儀す松の内
 松の内見すぎ世すぎはさておきて
 日は高き風呂を味はふ松の内
 松の内空に給油のオスプレイ
 松の内がなぜ七日間なのかは知らない。十五日までといふ所もある。
 山莊慶子
 木村茂登子
 長崎桂子
 七郎衛門吉保
 七郎衛門吉保
 齊藤裕子
 赤座典子
 七郎衛門吉保
 齊藤嘉久
 佐藤喜孝



明き白に二日の予定筆下ろす
 二日はや初目葉と言ふべかり
 二日かな松のうしろに夕茜
 穂穂のしらじらとある二日かな
 松の内一番静かなる二日
 かもぬよりしきぬが二日早や古ぶ
 コンビニで切手を舐めて二日かな
 二日はや日をうけとめし蒼かな
 中学生寝癖立たせて二日かな
 青年にゲーム教はる二日かな
 坊主捲り孫に教はる二日かな
 二日かな喃語にここに「だーいすき」
 魚市場かわくにほひも三日かな
 はや三日ブランデーグラス両の掌に
 はや三日干し物越に富士の山
 三日暮る群れ鴨の声町こゆる
 三日はや母の掌を占む輝の華
 子午線を指ではじいてゐる三日
 佐藤恭子
 堀内一郎
 佐藤喜孝
 佐藤喜孝
 木村茂登子
 定梶じょう
 佐藤喜孝
 佐藤喜孝
 篠田喜孝
 篠田喜孝
 田中藤穂
 赤座典子
 篠田大佳
 竹内弘子
 芝 尚子
 須賀敏子
 渡邊友七
 渡邊友七
 佐藤恭子

獅子舞をちらと見かける三日かな
 三日はや終日寡黙にハーブティー
 硯海の昼月擦りをろす三日
 三日はやクロワッサンの恋しかり
 雨戸引く三日の明けの吹雪かな
 待ちかねし下り諸白三日かな
 三日はやタヲルのほつれのごときかな
 はや三日月鈴鹿嵐に向かふ帰路
 三日にはホットケーキを初食す
 はや三日大学マラソン見損ふ
 三日にしてニュースもやつと寝正月
 三日朝駅伝と逆箱根入り
 青き空突き抜けてゐる三ケ日
 三ケ日遊び疲れし爪の伸び
 三ケ日営業中なり動物医院
 大病院全室灯し三ケ日
 三ケ日おもてをあるく下駄の鈴
 喰ひぶくれ鏡の中の三が日
 赤座典子
 芝宮須磨子
 佐藤恭子
 須賀敏子
 長崎桂子
 佐藤恭子
 佐藤喜孝
 長崎桂子
 大日向幸江
 大日向幸江
 篠田大佳
 七郎衛門吉保
 芝 尚子
 河合笑子
 森 理和
 芝宮須磨子
 竹内弘子
 鎌倉喜久恵

(佐藤喜孝)

あとがき

表紙

東京・虎ノ門の金刀比羅宮では、毎年一月十日の初こ
んぴら祭に、七福神や、おかめ、ひよつとこの行列が境
内を練り歩きます。おかめ、ひよつとこ踊りは軽快で躍
動感もあつて、楽しい光景です。(撮影も…不寝)

表紙の写真を今年は篠田純子さんと篠田大佳さんの写
真で飾らせていただきます。LINEで送られてくる純
子さんの街の季節感あふるる写真、いつも楽しんでをり
ます。このまま私一人で楽しむのはもつたいないとおも
ひお願いしました。一月号から楽しい写真ですよ。お楽
しみてください。

春蚓秋蛇

今月は『青写真』にいただいた滝先生の序文原稿です。
先生は拙句を俳句かだうかと首をかしげられてをられま
した。八田木枯さんにもちらつとそれらしきことをいは
れたことがあります。私は褒め言葉と勘違ひをして全く
反省もなく今に至つてをります。会員の作品も信念を貫
いて揺ぎがありません。これを利点と信じ、今年も俳句

を楽しませう。

秋収集

「秋収集」の下段を孫のエイマに預けていつのまにや
らその子も今年は高校受験の年となりました。同居して
ゐた時に生れた子なので、つぶさに成長のさまを見る楽
しみを得ました。「東京都公立学校美術展覧会」に「印鑑」
といふものが入選、飾られるさうです。親もどんな作品
なのだらつと首をひねつてをります。

(喜孝)

二〇二五年 二月号

発行日 一月二十七日

発行所 〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三

電話 090 9828 4244 サンハイツ石神井2 一階

印刷・製本・レイアウト カット／福井美佐子・ティリ エイマ 竹僊房

会費 一五〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行(普) (店番 018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)